原著論文

入学時のレジリエンス値が社会人基礎力およびGPAに及ぼす影響

EFFECTS OF HIGH AND LOW RESILIENCE SCORES OF NEW STUDENTS ON FUNDAMENTAL COMPETENCIES FOR WORKING PERSONS AND GPA.

荒　牧　隼　浩[1)]・大和田　宏　美[1)]
ARAMAKI Yoshihiro,　OWADA Hiromi

キーワード：レジリエンス , 社会人基礎力 , GPA
Key words：resilience, fundamental competencies for working persons（Action”, “Thinking”, and “Teamwork”), GPA

要　旨

【目的】
本研究は，理学療法学専攻１年生を対象に，入学時のレジリエンスを調査し，その高低値が社会人基礎力やGPAへ及ぼす影響について調査する縦断的研究である.

【対象者と方法】
対象は, 理学療法学専攻１年生68名とした．調査項目は, レジリエンスと社会人基礎力について調査し, 成績は前期・後期GPAを用いた．５月に調査したレジリエンスの得点を入学時のレジリエンスとし，対象者をLow群，Middle群，High群の３群に分けて，社会人基礎力とGPAとの関連性について比較検討した.

【結果】
入学時のレジリエンス値が低い学生は，５月の調査時と比べて12月の調査時では社会人基礎力が低下していた．入学時のレジリエンス値が低い学生は，12月時の調査では他群と比べると社会人基礎力のアクション，チームワークが低下していた．３群間では前期・後期GPAにおいて有意差はみられなかった.

【結論】
本研究結果より，入学時のレジリエンスが大学生活を送るなかで社会人基礎力の変化にも影響を及ぼすことが示唆された .

1）仙台青葉学院短期大学　リハビリテーション学科　理学療法学専攻

Abstract

【Purpose】

The purpose of this study was to examine the resilience of first-year students in the Department of Physical Therapy at the time of their enrollment and to examine longitudinally the effects of their high and low resilience on their fundamental competencies for working persons and GPA.

【Participants and Methods】

The subjects were 68 first-year students majoring in physical therapy. The survey items were resilience, and fundamental competencies for working persons as a member of society, and GPA for the first and second semesters were used as grades. The resilience score obtained in May was defined as the resilience at the beginning of the school year, and the subjects were divided into three groups (Low, Middle, and High groups) to compare the relationship between resilience and fundamental competencies for working persons.

【Results】

As a result, it was found that students with low resilience scores in the early stage of school entry showed a decline in fundamental competencies for working persons in the December survey compared to the May survey. In addition, students with low resilience in the early stage of school entry showed lower scores in the action and teamwork items of the fundamental competencies for working persons than the other students in the December survey. There were no significant differences in GPA among the three groups.

【Conclusion】

The present study suggests that resilience in the early stage of school entry may influence the change of fundamental competencies for working persons during their college life.

【はじめに】

理学療法士養成校数は年々増加し，令和3年度では，279校の養成校数となり，養成校の学生定員数は14,574人と増加している［1］．一方で，養成校数の増加とともに，理学療法士の輩出数も増加の一途を辿る．理学療法士養成校の増加は理学療法士を目指す学生の門戸が広がり，養成校への入学がひと昔に比べると容易になり，多くの学生が理学療法士を目指せる時代となった．本学も理学療法士を目指す学生を多く受け入れている養成校の一つである．本学の学生は様々な高等教育を受けて入学してきているが，入学後は，基礎医学，臨床医学，専門理学療法学および臨床実習などの専門的な知識の学修を求められることになる．また，理学療法教育を通して，医療人としての資質，社会人としての適性も求められる．そのため，学生は理学療法士になるためにただ勉強するのではなく，教員も学生の適性や得意な能力を把握し伸ばすことが重要であり，学生にあった指導方法の模索が必要となる．

社会人基礎力は，職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力とされており，「前に踏み出す力（アクション）」，「考え抜く力（シンキング）」，「チームで働く力（チームワーク）」の3つの能力と12の能力要素から構成されている［2］．近年，大学教育においても専門的知識に加え，それらを社会の中で活かすためには社会人基礎力が重要であると考えられ，多くの教育機関で社会人基礎力の養成が行われている［3］．そのため，医療系大学生を対象とした社会人基礎力についても多くの研究報告が見受けられ

る［4］［5］．また，文部科学省の発表によると，令和3年度末の大学退学者率は1.95％である［6］．退学理由は，「転居等」が16.3％で最も多いが，次に「学校生活不適応・修学意欲低下」が15.7％となっている［6］．学校生活不適応は大学生活に馴染めずに，人間関係の構築が問題となることが多く［7］，大学内で多様な人々と協調しながら行動することが困難な学生が該当すると予想できる．そのような学生は，本来大学生活で身につけていく社会人基礎力の欠如が学校生活不適応を引き起こす要因の一部だと推察される．さらに，大学生活は学修内容や対人関係，生活環境が高校時代とは大幅に変化し，様々なストレスを受けやすいことも学業継続が困難となる原因だと考える．そのため，大学生活においては専門的知識・技術や社会人基礎力の向上と併せて，ストレスフルな状況を乗り越えるために必要なレジリエンス力も重要になると考える．レジリエンスとは，困難な環境にも関わらず，うまく適応する過程・能力・結果とされており，精神的健康の維持あるいは回復に関連した研究で注目されている概念である［8］．レジリエンスで高値を示す学生は，さまざま環境や社会への適応能力が高い．一方で，レジリエンスで低値を示す学生は新しい大学生活の環境下にて学修面や対人関係にうまく適応することができず，その結果として大学生活にも柔軟に適応できない可能性がある．社会人基礎力の成長や学内成績に悪影響を及ぼし，その結果として退学に繋がっていくことが予測される．そのため，入学時のレジリエンス力を把握することは非常に重要である．教育に関する様々な先行研究からは，レジリエンスと社会人基礎力の直接的な関連性を調査した報告は見受けられないが，社会人基礎力の3つの能力と12の能力要素と類似した因子との関連性については多く報告されている．例えば，レジリエンスの高い学生は自己教育力（問題意識や主体的思考，学習の仕方，計画性，自主性など）が高いことが報告されており［9］，人間関係の円滑な形成や維持に必要とされるソーシャルスキルの能力も優れているとされている［10］．これらの先行研究を踏まえると，レジリエンスの高低が社会人基礎力や学内成績を反映するGrade Point Average（以下，GPA）にも何らかの影響を及ぼす可能性がある．これらのことから，レジリエンスを把握することは社会人基礎力の変化や学内成績を予測できる指標になるのではないかと考える．

そこで，本研究の目的は，新入学生に対して入学時のレジリエンスに着目し，社会人基礎力やGPAに及ぼす影響について縦断的に調査した．

【方法】

対象は，理学療法学専攻1年生80名とした．入学時のレジリエンス値が社会人基礎力，成績に及ぼす影響を分析した．レジリエンスと社会人基礎力は質問紙を用いて調査した．調査期間は1年次の5月と12月の2回実施した．成績に関しては前期および後期のGPAを用いた．今回，入学時のレジリエンスとして，5月に調査したレジリエンスの結果を採用した．最終的な分析対象者は，68名（男性25名，女性43名）であった．回答に不備があった者，また質問紙調査を2回実施できなかった者は分析対象から除外した．対象者には，回答は任意であること，回答されたデータは統計的に処理されるため，個人が特定されることはないこと，回答内容が授業の成績に影響を及ぼすことはなく個人の不利益には一切ならないことを説明した．調査の手順としては，本研究の目的と概要を説明し，同意を得られた学生に質問紙を用いたアンケートの回答を求めた．調査に要した時間は15分程度であった．本研究は仙台青葉学院短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号0302）．

レジリエンスは，祐宗省三が作成したS-H式レジリエンス検査（竹井機器工業株式会社）を用いた［11］．ソーシャルサポート，自己効力感，社会性に関する設問で構成された27項目である（表1）．これらには「1．全くそうではない」～「5．全くそうである」までの5件法で回答を求めた．合計最高得点は135点である．得点が最高得点に

表１．S-H レジリエンス検査 文献［11］より引用．

1	あなたは家族や親しい人と過ごす時間を大切にしていますか
2	あなたは愛情を注いでいるものがありますか
3	あなたは人を頼り過ぎないように心がけていますか
4	あなたは慣れている仕事をするよりも、誰も手をつけていない仕事をやってみたいですか
5	あなたはは気が合いそうもないと思う相手であっても、相手に合わせて付き合い方をかえられますか
6	あなたには精神的に癒しを感じるものがありますか
7	これまでのつらい経験の中には、あなたの役に立った経験もあると思いますか
8	あなたはそのときの状況によって、計画を変えることが出来ると思いますか
9	あなたは困難な仕事であっても、それにあった様々な方法をもっていますか
10	あなたはどんな人とでも、うまくつきあうことができますか
11	あなたにはわがままを聞いてもらえる人がいますか
12	あなたにはあなたを誰よりも大切に思ってくれる人がいますか
13	あなたは困難な仕事で思いがけない負担がかかっても、何とかやっていけますか
14	あなたはこれからも仕事がむずかしそうでも、やっていけると思いますか
15	あなたは嫌いな人でも、仕事のためならうまくつきあっていくと思いますか
16	あなたは自分の悩みを話せる人が、家族以外にいますか
17	あなたは、今後、信頼できる人に出会えると思いますか
18	あなたは失敗するだろうと人から思われている仕事でも、やっていけると思いますか
19	あなたはいやなことでも自分がすべきことには、積極的にかかわっていますか
20	あなたは職場（学校）で新しい人が入ってきても、その人とうまくやっていけますか
21	あなたにはお手本にしたい人や、そのようになりたいと思う人はいますか
22	あなたには仕事の上で信頼できる人がいますか
23	あなたはやる気をなくす問題がおこったときでも、解決する努力をすると思いますか
24	あなたは一つのことに対して、いろんな解決方法を試すほうですか
25	あなたはどんな人ともそれなりにつき合っていけるほうですか
26	あなたには必要なときに頼りにできる人がいますか
27	小学生の頃、あなたのまわりには、あなたに愛情を注いでくれる人がいましたか

【1】主体性　（物事に進んで取り組む力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む		
2. 他人に先駆けて自己を打ち出している		
3. 定見を持って自主的に判断して行動している		
4. 躊躇することなく行動に移っている		
5. 何事も自分のこととして受け止めて動くことができる		
6. 公私ともに自己啓発にチャレンジできる		点

【2】働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 周りの人に率先して呼びかけ、目的に向かって周囲の人を動かしていく		
2. 他人を目標に向かって集中させる		
3. 自分の目標を取り下げても、全体をまとめるように専念している		
4. 全員に働きかけて課題達成に導いている		
5. 発言をひとり占めしたり、攻撃的言動でしらけさせたりしていない		
6. あまり意見のでていないメンバーの発言を促している		点

【3】実行力（目的を設定し、確実に行動する力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 言われた事だけをやるのではなく、自ら目標を設定し、失敗を恐れずに行動に移し粘り強く取り組んでいる		
2. 時間が経過しても疲れを見せずに行動している		
3. 責任感があり、何事にも簡単にはあきらめない		
4. 何事にもスピード感を持って迅速に行動する		点

【4】課題発見力（現状を分析し、目的や課題を明らかにする能力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 目標に向かって、自らここに問題があり、解決が必要だと提案する		
2. なぜそうなっているのかを常に考えている		
3. 物事の本質を見極め、原因を掘り下げ、要因を探っている		
4. あるべき姿やあるべき基準に照らして、近づけるようにしている		
5. 目標達成の阻害要因を把握し、その排除に取り組んでいる		
6. 現象面に捉われず、内在する原因をつかむようにしている		点

【5】計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 課題に解決に向けた複数のプロセスを明確にし、その中で最善のものは何かを検討し、それに向けた準備をしている		
2. 目標達成に至る道順をまえもって立てている		
3. 前もって時間の配分や進行の手順を具体的にたてている		
4. 常に目標に向かって進んでいるかを意識している		
5. 目標達成のための役割分担、スケジューリング、進行度のチェック体制などの組立を適確に進めている		点

【6】創造力（あたらしい価値を生み出す力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考えている		
2. 既成概念に捉われず、自由で新しい発想ができる		
3. 他人の考えにヒントを得て、新しいアイデアを出している		
4. 前歴や慣行や前任者のやり方に拘らず、豊かな発想で変革していく		
5. 時代や環境の変化を先取りし、先見性に基づく革新を目指している		
6. いくつかの考えを統合して、新しい考え方を打ち出している		点

【7】発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 自分の意見を分かりやすく整理したうえで、相手に理解してもらえるように適確に伝えている		
2. 明瞭な発音で、流暢な話方をしている		
3. 相手に視線を向け、身を乗り出して話している		
4. 簡潔に短時間で要点をまとめて話している		
5. 気持ちがありありと伝わり、説得力がある		点

【8】傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出している		
2. 相手の発言や気持ちを全身を耳にして聴いている		
3. 他人の発言に対してフィードバックし要旨を確認している		
4. 相手の話の腰をおらず、最後まで聞くようにしている		点

【9】柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し、理解するようにしている		
2. 他からのアドバイスをすすんで受け入れている		
3. 状況に応じて、相手への接し方を修正している		
4. 自分の案に固執することなく、よりよい案を受け入れるようにしている		点

【10】状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解している		
2. 自分の行動や発言が相手にどのような影響を与えているかを考えている		
3. 利己的な態度をとらず、他の人たちとギクシャクすることはない		
4. 特定の人に意識をするのではなく、グループ全体に気を配っている		
5. 全体に及ぼす影響を意識し、考えながら行動している		点

【11】規律性（社会のルールや人との約束を守る力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律している		
2. 法と規則を守り、信用を確保・維持している		
3. 高い倫理観を持ち、公正に対応している		
4. 集合、開始、休憩、終了、解散時の時間厳守や対応は適確である		
5. 決められたことについては素直に従っている		点

【12】ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）	点	5段階評価で1～5点を記入
1. ストレスを感じることがあっても、成長の機会だと前向きにとらえて肩の力を抜いて対応している		
2. 圧迫状況下にあっても、質の高い判断をし、課題を遂行している		
3. 圧迫そのものが気にならず、真からリラックスしている		
4. 一貫して安定した気持ちを持ち続けている		
5. 圧迫にあっても攻撃的にならず、イライラすることもない		
6. 適当な気晴らしの方法を持っている		点

■ 点数基準
5：その通り　4：ほぼその通り　3：どちらでもない　2：ほぼ当てはまらない　1：当てはまらない

総合計
／60

図１．社会人基礎力自己診断シート 文献［12］より引用．

近いほど高いレジリエンス力を示している．社会人基礎力は，自己診断シート［12］を用いた（図1）.「アクション（前に踏み出す力）」「シンキング（考え抜く力）」「チームワーク（チームで働く力）」の3分類で構成され，社会に出る前，とりわけ大学期に身に着けておくべき能力とされている.「アクション（前に踏み出す力）」は主体性，働きかけ力，実行力の3項目,「シンキング（考え抜く力）」は課題発見力，計画力，想像力の3項目, チームワーク（チームで働く力）」は発信力，傾聴力，柔軟性，状況把握力，規律性，ストレスコントロール力の6項目の能力要素から構成されている．各項目に対する設問に対して,「1．当てはまらない」～「5．その通り」までの5件法で回答を求めた．各分類の最高得点は「アクション（前に踏み出す力）」が15点,「シンキング（考え抜く力）」が15点，チームワーク（チームで働く力）」が30点となり，総得点は60点となる．得点が高いほど，社会人基礎力に対する能力が高いことを示している．成績に関しては，前期および後期のGPAをもちいた．GPA制度は文部科学省が推奨している成績評価の方法であり，GPAの計算には単位数による重み付けがされていて，学業成績を表すよい指標であると考えられる［13］. GPAの段階は0～4となっており，最高値が4となっている.

今回，5月に実施したレジリエンスの結果より，レジリエンスの総得点から四分位を求めて，25パーセンタイル以下をLow群，26パーセンタイル以上～75パーセンタイル未満をMiddle群，それから75パーセンタイル以上をHigh群と操作的に3群を定義した．統計学的解析は，まず社会人基礎力の各項目（アクション，シンキング，チームワーク，総合点）と前期GPA，後期GPAの正規性を確認するためShapiro-Wilkの検定をおこない，全ての水準で正規性が確認された．次に，社会人基礎力の各項目における時期（5月と12月の経時的変化）と群（Low群，Middle群，High群）の2要因の比較に分割プロットデザインによる分散分析を用いた．その後，主効果あるいは交互作用が有意となった項目に対する事後検定として，対応のない要因に対して，TukeyのHSD法で多重比較をおこなった．対応のある要因に対しては，対応のあるt検定をおこなった. 3群間における前期GPAと後期GPAのそれぞれの比較は，Leveneの検定後，一元配置分散分析をおこなった．なお，解析には統計ソフトウェアSPSS ver.21.0 J for Windowsを使用し，有意水準はそれぞれ5%とした.

【結果】

入学時のレジリエンスの群分けは，Low群101点以下（18名），Middle群102～116点（31名），High群117点以上（19名）であった．また，分析対象から除外した12名の学生の内訳としては，退学者6名（12月調査時），アンケート回答の記載漏れ2名（5月調査時1名，12月調査時1名），不参加4名（12月調査時）とあった.

まず，社会人基礎力の各項目における時期および群の2要因の比較結果を表2で示す．シンキングの群の主効果および交互作用においては有意な差が認められなかった．そのため，シンキングは

表2．社会人基礎力の各項目における時期および群の2要因の比較

	Low 群 n=18		Middle 群 n=31		High 群 n=19		時期の主効果		群の主効果		交互作用	
	5月	12月	5月	12月	5月	12月	F値	p値	F値	p値	F値	p値
アクション	9.9 ± 1.3	7.8 ± 1.9	9.8 ± 1.5	9.3 ± 1.8	10.8 ± 1.1	10.1 ± 1.9	25.537	0.001**	6.176	0.004**	4.615	0.013*
シンキング	9.6 ± 1.7	7.7 ± 2.5	9.9 ± 1.8	9.1 ± 2.0	9.9 ± 1.3	9.1 ± 2.0	22.573	0.001**	1.773	0.178	2.287	0.100
チームワーク	22.0 ± 2.9	19.5 ± 3.2	22.8 ± 2.3	22.8 ± 3.2	23.1 ± 2.5	23.1 ± 3.2	4.425	0.039*	5.529	0.006**	3.884	0.026*
総得点	41.5 ± 5.2	35.0 ± 6.8	42.5 ± 4.0	41.2 ± 6.0	43.8 ± 3.4	42.2 ± 5.8	17.752	0.001**	4.865	0.011*	4.865	0.011*

平均値 ± 標準偏差 , 分割プロットデザインによる分散分析 , *: $p<0.05$, **: $p<0.01$.

事後検定の3群間（対応のない要因）における比較は実施していない．その他は，すべて有意差が認められたため，事後検定をおこなった．各群における5月と12月の社会人基礎力の変化を表3で示す．レジリエンスがLow群の学生は全ての項目で5月と比較し，12月で社会人基礎力のスコアが低下し，有意差が認められた（全て $p<0.01$）．Middle群は，シンキングのみが5月と比較し12月で低下し，有意差が認められた（$p<0.05$）．High群は全ての項目で有意差は認められなかった．次に，3群間における社会人基礎力の比較の結果を表4に示す．5月の調査においては，全ての項目において有意差は認められなかった．12月の調査においては，社会人基礎力のアクション，チームワーク，総得点の3項目にてLow群と比較し，Middle群，High群において有意差が認められた（アクション Low vs Middle $p<0.05$，その他全て $p<0.01$）．3項目ともにLow群は有意に低かった．また，Middle群とHigh群では有意差が認められなかった．

表3．各群における5月と12月の社会人基礎力の変化

		5月	12月	p値
Low群	アクション	9.9 ± 1.3	7.8 ± 1.8	0.001**
n=18	シンキング	9.6 ± 1.7	7.7 ± 2.4	0.001**
	チームワーク	22.0 ± 2.9	19.5 ± 3.2	0.001**
	総得点	41.5 ± 5.2	35.0 ± 6.8	0.001**
Middle群	アクション	9.8 ± 1.5	9.3 ± 1.8	0.130
n=31	シンキング	9.9 ± 1.8	9.1 ± 2.0	0.046*
	チームワーク	22.8 ± 2.3	22.8 ± 3.2	1.000
	総得点	42.5 ± 4.0	41.2 ± 6.0	0.249
High群	アクション	10.8 ± 1.1	10.1 ± 1.9	0.059
n=19	シンキング	9.9 ± 1.3	9.1 ± 2.0	0.100
	チームワーク	23.1 ± 2.5	23.1 ± 3.2	0.940
	総得点	43.8 ± 3.4	42.2 ± 5.8	0.250

平均値 ± 標準偏差 , 対応のある t 検定 , *: $p<0.05$, **: $p<0.01$.

表4．5月と12月における3群間の社会人基礎力の比較

			5月					12月				
			平均値の差	標準誤差	p値	95% 信頼区間 上限	95% 信頼区間 下限	平均値の差	標準誤差	p値	95% 信頼区間 上限	95% 信頼区間 下限
アクション	Low群	vs Middle群	0.041	0.395	0.994	-0.906	0.987	-1.489	0.548	0.023*	-2.804	-0.175
		vs High群	-0.901	0.438	0.107	-1.951	0.150	-2.219	0.608	0.002**	-3.678	-0.761
	Middle群	vs High群	-0.941	0.388	0.051	-1.872	0.010	-0.730	0.539	0.370	-2.022	0.562
チームワーク	Low群	vs Middle群	-0.807	0.745	0.528	-2.593	0.980	-3.307	0.949	0.003**	-5.582	-1.031
		vs High群	-1.105	0.827	0.380	-3.088	0.878	-3.553	1.053	0.004**	-6.079	-1.027
	Middle群	vs High群	-0.299	0.732	0.912	-2.055	1.458	-0.246	0.933	0.962	-2.484	1.991
総得点	Low群	vs Middle群	-1.032	1.258	0.692	-4.051	1.986	-6.226	1.829	0.003**	-10.613	-1.839
		vs High群	-2.290	1.397	0.237	-5.640	1.061	-7.211	2.030	0.002**	-12.080	-2.341
	Middle群	vs High群	-1.257	1.237	0.569	-4.225	1.710	-0.985	1.798	0.848	-5.298	3.329

Low群 : n=18, Middle群 : n=31, High群 : n=19.
多重比較法 (Tukey法), *: $p<0.05$, **: $p<0.01$.

最後に，3群間の前期GPAおよび後期GPAのそれぞれの結果を表5に示す．前期GPA，後期GPAともに3群間で有意な差は認められなかった．

表5．3群間の前期GPAおよび後期GPAの比較

	前期 GPA					後期 GPA				
	Low 群 n=18	Middle 群 n=31	High 群 n=19	F 値	p 値	Low 群 n=18	Middle 群 n=31	High 群 n=19	F 値	p 値
GPA	2.5 ± 0.6	2.5 ± 0.6	2.4 ± 0.6	0.352	0.705	2.4 ± 0.6	2.4 ± 0.6	2.3 ± 0.6	0.145	0.868

平均値±標準偏差，1元配置分散分析．

【考察】

今回，本学の理学療法学専攻1年生を対象に，入学時のレジリエンスが社会人基礎力とGPAに及ぼす影響を縦断的に調査した．本研究では，5月のレジリエンスの得点から対象者をLow群，Middle群，High群の3群に分けて検討した．3群間にて比較した理由として，レジリエンス得点の高低を細かくカテゴリー化することで，集団間の類似性や異なる群との差異，また最下位層の集団の特徴を分析するためである．また，先行研究の中にも同じ質問紙調査である運動有能感尺度の得点から四分位数を用いて3群間を比較している研究が見られている［14］．本研究の検討内容は3つであり，1つ目は各群における5月と12月の社会人基礎力の変化，2つ目は5月と12月の3群間における社会人基礎力の比較，3つ目は3群間で前期GPAと後期GPAをそれぞれ比較した．

まず，各群における5月と12月の社会人基礎力の変化は，入学時のレジリエンスがLow群の学生は社会人基礎力の総得点，下位尺度のアクション，シンキング，チームワークの全ての項目で5月と比べて12月の調査にて低下していることが示された．Middle群は，5月と比べて12月の調査ではシンキングのみ低下しており，High群は全ての項目で有意差は認められなかった．そのため，入学時にレジリエンス力が低い学生は，大学生活を送る中で社会人基礎力の自己評価が低くなる傾向が特徴として示された．大学1年時は，大学生活に慣れていない環境下で，ストレスフルな状況が続くことが考えられる．レジリエンスが高い者は，困難な状況下に陥っても，より適切な解決方法を選択して対処し，他者に援助を求めると言われている［15］．しかし，Low群の学生は，そのストレスフルな状況を乗り越えるときに必要とされるレジリエンスが乏しく，大学生活に適応できていない可能性が考えられる．今回調査に用いたS-H 式レジリエンス検査［11］はソーシャルサポート，自己効力感，社会性に関する設問で構成されている．そのため，Low群の学生はそれらの要素が低い状態で大学生活をスタートしていることが推察される．大学生活に適応しているか否かを表す尺度として大学適応感がある［16］．大学生活が居心地よく，友人や教員と良好な人間関係を築いて，目的をもって充実した学生生活をすごす学生は大学適応感が高いとされている．阿久津ら［17］は，それらの大学適応感と自己効力感との間には正の相関関係を有していることを報告している．つまり，レジリエンスの構成要素の1つである自己効力感が低い学生は大学適応感も低下していることを示している．自己効力感と大学適応感が低い場合，自分自身に対する自信が持てず，主体的に目的をもって行動することや，自らの意思で他者と協力して物事をおこなうことが困難となることが推測される．また，松尾ら［18］は，レジリエンス低得点群は他者に関わることに積極的ではなく，1人で抱え込んでしまい，困難を乗り越えた成功体験を積み重ねることが難しいと述べている．さらに，たとえ他者からのサポートを受けて，困難を乗り越える経験をしたとして

も，自分の力で解決できたという達成感が低いために，自信に繋がりにくい特性をもっていると報告している［18］．先行研究の知見や今回の調査結果から，レジリエンスが低い学生は，経時的変化とともに社会人基礎力の自己評価が低くなる可能性が示唆される．そのため，レジリエンスが低い学生を早い段階で検出し，その学生に適した指導方法を取り入れていく必要がある．学生と積極的にコミュニケーションをとり，学生が得意な能力を把握し，伸ばしてあげることで学生自身の自信に繋げていくことが重要であると考える．

2つ目の検討内容である3群間における社会人基礎力の比較は，5月の調査では3群間で有意差は見られなかった．つまり，5月の時点ではレジリエンスの高低が社会人基礎力には影響を及ぼしていないことが判明した．一方,12月の調査では，社会人基礎力の総得点，下位尺度のアクション，チームワークにてLow群はMiddle群，High群と比べて有意に低い結果となった．Low群は5月時点と比較し，12月の調査にて明らかに社会人基礎力が低下していることが示されている．その経時的変化の特徴が，12月における3群間での比較においても影響を及ぼしたと考えられる．このことから，入学時のレジリエンスの高低が社会人基礎力に影響を及ぼすタイミングは，ある程度の期間のずれがあることがわかった．そのため，その期間内に起こったストレスフルな状況をどのように乗り越えていくかにより，社会人基礎力は変化していくのではないかと考えられる．

また，3つ目の検討内容である3群間で前期GPAと後期GPAを比較したが，レジリエンスの高低差はGPAに影響しないことが示された．GPAを予測する指標としては別の要因を検討する必要があると考える．今後，専門性が高い科目が増えてくる2年次以降のGPAや実習成績との関連性も検討していく必要があると思われる．

医療人として，社会人としての資質を求められる理学療法教育を実施していくうえで，入学時にレジリエンスを調査することにより，社会人基礎力への影響を見出すことができた．同時に，社会人としての適性や学生の得意・不得意な能力を把握することも可能になることがわかり，学生の特徴にあった適切な教育が可能になると考えられる．本研究の限界として，S-H式レジリエンス検査と社会人基礎力テストともに多くの研究にて用いられていることから，質問紙としての精度は大きく問題ないと考える．しかし，回答精度に対する問題は完全には排除できていない．記名式であることや教員が介入していることを踏まえると，回答バイアスの存在を考慮した結果の解釈が必要だと考えられる．今後は，中立的な立場である第3者による介入やコンピューター回答などの調査方法に変更し，回答バイアスを減じる工夫が必要であると考える．次に，調査対象を理学療法学専攻のひと学年としているため，この結果を一般化するには限界がある．今後は，その他の学年や他分野の学生との比較，2年次時以降の継続した調査が必要となってくると考える．さらに，本研究の群分けとして，四分位数を用いた方法を採用した．この場合，Middle群に群分けされる対象者が多くなり、統計結果に影響が生じる可能性があるため，今後の課題となっている．また，分析対象から除外された学生の中で6名が退学者である．退学理由としては，成績不良者や学修意欲の低下となっていることが多く，学内成績を反映しているGPAの結果に影響している可能性もある．そのため，今後は中途退学者を含めた分析方法を検討し，そのような状況に陥った学生の特徴を捉え,退学率や留年率との関係性も示していきたい．最後に，レジリエンスは特別な能力ではなく，どの世代でも獲得でき，伸ばしていけるものだとされている［19］．そのため，大学生活を送るなかでレジリエンスが向上した学生，あるいは低下した学生の社会人基礎力の変化や成績を経時的に追っていくことで，今後の学生指導において学生の適性や能力を把握することができ，個々の学生に適した助言が可能となり，社会人として，医療人としての養成が必須である理学療法教育を実施していくうえで重要な指標となるであろう．今後の学生指導の一助としていきたい．

【結論】

本研究は，入学時のレジリエンスの得点から対象者を Low 群，Middle 群，High 群の 3 群に分けて，5 月と 12 月の社会人基礎力の変化，3 群間における社会人基礎力を比較した．また，学内成績を反映する前期 GPA と後期 GPA を 3 群間でそれぞれ比較した．その結果，入学時のレジリエンスが低い学生は，5 月の調査と比べて 12 月の調査では社会人基礎力が低下することが示された．また，入学時のレジリエンスが低い学生は，12 月の調査にて他学生と比べると社会人基礎力のアクション，チームワークの項目が低下していることが示された．一方で，5 月の時点では差がないことが示された．さらに，入学時のレジリエンスの値は前期 GPA，後期 GPA ともに影響しないことも示された．本研究結果は，入学時のレジリエンスが社会人基礎力に影響を及ぼすことが示され，その変化を予測する 1 つの指標となり得ることを示した意義のあるものだと考えられる．そのため，学生指導においても，レジリエンスが低い学生に対しては，早期から教員側からのサポート体制が必要であると考える．

【謝辞】

本研究は，令和 3 年度仙台青葉学院短期大学学長裁量研究費（0305，代表：荒牧隼浩）の助成を受けたものである．

引用文献

[1] 公益社団法人 日本理学療法士協会ホームページ協会の取り組み 統計情報. https://www.japanpt.or.jp/activity/data/（2022 年 5 月 16 日引用）

[2] 経済産業省「社会人基礎力」育成のススメについて～社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して～. https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286890/www.meti.go.jp/press/20070517001/20070517001.html（2022 年 5 月 1 日引用）

[3] 藤井文武，平尾元彦：社会人基礎力を高める授業の実践－産学連携 PBL 授業「アクティブラーニング」の取組．大学教育．2010；7：23-34.

[4] 木村まりこ，原口健三，中原雅美，他：作業療法学科学生の社会人基礎力－臨床実習経験による変化－．リハビリテーション教育研究．2015；20：88-89.

[5] 北島洋子，細田泰子，星和美：看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討．大阪府立大学看護学部紀要．2011；12（1）：13-23.

[6] 文部科学省：学生の修学状況（中退者・休学者）等に関する調査【令和 3 年度末時点】. https://www.mext.go.jp/content/20220603-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf（2022 年 6 月 16 日引用）

[7] 大久保智生：青年の学校への適応感とその規定要因：青年用適応感尺度の作成と学校別の検討．教育心理学研究．2005；53：307-319.

[8] Masten, A. S., Best, K. M, & Garmezy, N.: Resilience & development：Contributions from the study of children who overcome adversity. Development & Psychopathology. 1990；2：425-444.

[9] 齊藤和貴，岡安孝弘：大学生のソーシャルスキルと自尊感情がレジリエンスに及ぼす影響．健康心理学研究．2014；27（1）：12-19.

[10] 森敏昭，清水益沿，石田潤・他：大学生の自己教育力とレジリエンスの関係．学校教育実践学研究．2002；8：179-187.

[11] 祐宗省三：S-H 式レジリエンス検査．竹井機器工業株式会社．2007.

[12] 社会人基礎力自己診断シート. http://graceful.blush.jp/（2021 年 5 月 1 日引用）

[13] 文部科学省：大学における教育内容・方法

の改善等について.
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm
(2022年5月9日引用)

[14] 小林薫, 柊幸伸：大学生における運動有能感の高低と運動習慣および健康関連指標に関する調査. 理学療法科学. 2018；33 (1)：55-58.

[15] Flach,F.F：The power to bounce back when the gets tough!. New York Hatherleigh Press. 1997.

[16] 山田ゆかり：大学新入生における適応感の検討, 名古屋文理大学紀要. 2006；6：29-36.

[17] 阿久津洋巳, 大矢薫, 若松直樹：医療系大学生において大学適応感と自己効力感が主観的幸福感に及ぼす影響. 新潟リハビリテーション大学紀要. 2019；8：19-30.

[18] 松尾綾, 前田由紀子：レジリエンスと問題解決に向けた行動特性との関連－看護大学生のインタビューからの比較検討－. 西南女学院大学紀要. 2015；19：27-36.

[19] Groterg, E.H.：Resilience for Today：Gaining Strength from Adversity. Prager Publishers. 2003；1-30.